

2019 年度
ベスト・ティーチング・アワード
取組内容紹介

東京都立大学ベスト・ティーチング・アワード

本学では、学生が本物の“考える力”を身に付けられる教育環境を確立するために、アクティブ・ラーニングの推進や学修成果の可視化などの教育改革に全学を挙げて取り組んでいます。その中で、教育改善をさらに推進するため、教育の質の改善に貢献が認められる優れた取組に対して、「ベスト・ティーチング・アワード」を授与し、当該取組を実施した教員を優秀教員として表彰する制度を2019年度に新設しました。

2020年9月30日に第1回目の表彰式を開催し、本学初となるベスト・ティーチング・アワード3件及び特別賞1件を表彰し、また当該取組を実施した教員に対して、上野学長から賞状と盾を授与しました。ここでは、その取組内容を紹介します。

2019年度東京都立大学 ベスト・ティーチング・アワード（3件）

受賞取組：学生自身の視点を生かし、人類学的な実践

を作品化する—インタビュー・定点観察・映像撮影—

代表者：田沼幸子 准教授（人文社会学部）

共同実施者：深山直子 准教授（人文社会学部）



（左から、深山准教授、上野学長、田沼准教授）

取組概要：社会人類学演習Ⅱ（20人程度が履修）において、社会科学の質的調査法であるフィールドワークの基本を実践を通じて学ぶ。学術的知識を学生に与え、学生自身が興味関心を定め、調査関係者と交渉を通じて合意形成をし、インタビュー・定点観察・映像撮影を実施し、他者の視点を意識した映像作品を仕上げる。一連の過程を通じて、学生の自発性と臨機応変性を育成する。

受賞理由：フィールドワークを通じた動画の作品化を、学生に対し学術的知識を与えたうえで、学生の能動性

を引き出す形で効果的に実践している点。更に、人文学期に掲載するなど、事例の成果を広く展開している点も評価できる。

【以下、代表者へのインタビュー】

—受賞・評価を受けた感想

2016年から始めてきた取り組みが、履修生以外の方々にも評価されたということで、とても嬉しいです。派手さはないですが、学生たちの自主性を生かした点を評価していただけたのは、本学ならではの嬉しく思いました。

—この取組を実施するにあたり、特に苦労した点

機材の準備、課題の教授方法など、履修生が増えるにつれ試行錯誤しましたが、教室の先生方、事務の方々、TAの皆さんの協力があり、円滑な運営につながりました。シャイな学生達が忌憚なく発言できるよう、ブレインストーミングの時などは、教員二人がDJのように話し、リラックスさせ盛り上げていきました。

—この取組に対する想い

学生は、読む、聞く、書く、撮る、編集する、という様々な実践的課題を一年間かけて、毎週のようにこなすことを予め知って履修するため、モチベーションが高く、指導の甲斐がありました。学生からは、「朝早くても楽しみだった」、「自分がやりたいことや表現したいことができて嬉しかった」、「他の人が何を見たり考えたりしているのかを知ることができて面白かった」という感想が挙がりました。学生同士の交流と気づきの場ともなることを心がけていました。

受賞取組：kibaco を利用した能動的学修支援システムの構築

代表者：山登正文 准教授（都市環境学部）

共同実施者：柳下崇 准教授／久保由治 教授／梶原浩一 教授（都市環境学部）、他環境応用化学科教員



（左から、梶原教授、柳下准教授、上野学長、山登准教授、久保教授）

取組概要：「従来型の講義授業」において十分な授業外学修を確保するための仕組みとして、本学のLMS（kibaco）上に能動的学修支援システムを構築し、運用した。PBL やプレゼンテーション指導が主体の環境応用化学基礎ゼミナールと応用化学英語以外のすべての必修講義科目（1，2 年生で実施の 13 科目，26 単位）と必修実験科目（2，3 年生で実施の 6 科目，10 単位）において kibaco を用いた WEB 予習テストや WEB 理解度確認テストを実施することで、授業外学修時間を増加させ、単位の実質化に繋げた。

受賞理由：kibaco を用いた WEB 予習テストや WEB 理解度確認テストの導入により授業外学修時間の増加が認められるとともに、本取組が環境応用化学科の大半の必修講義科目で実施されている点。今後も、システムの更新等を通じ、「単位の実質化」に向けた取組の継続が期待される。

【以下、代表者へのインタビュー】

—受賞・評価を受けた感想

栄えある賞をありがとうございます。学科全体として取り組んでいたことが評価されたのだと思っています。実施にあたりご協力いただいた多くの先生方に感謝しております。

—この取組みを実施するにあたり、特に苦労した点

多くの授業で WEB テストを実施できるよう、環境を整備することです。数式や化学式を含む問題や数値の問題など、化学系で必要とされるいくつかの形式での問題を作成し、その作成マニュアルを公開することで、WEB テスト導入のハードルを下げよう工夫しました。また、画像データの保存先も兼ねた「年度更新されない学科共通コース」を kibaco 上に新たに作成することで、更新作業の手間を大幅に改善できました。これらの結果、WEB テストは学科の教育資産として更新され続けています。

—この取組みに対する思い

授業を理解できたという実感が学修のモチベーションを高め、能動的学修習慣の獲得につながっていると思います。予習、講義・演習、復習の学修サイクルをいかに廻すかを考えたとき、すべての過程で、学修に対してタイムリーにフィードバックを行うことで、様々な気づきを促すことができるのだと思います。今回用いた kibaco のような ICT ツールの利用は授業外学修への素早いフィードバックに効果的です。本取組により学生からは授業が分かりやすくなったとの反応を頂きました。

（式典の全体集合写真）



（都立大史上初のベスト・ティーチング・アワードの授賞式でしたが、非常に和やかな雰囲気の中、式典は進行了ました。学長からは取組の感謝とともに取組の継続等について挨拶があり、改めて、教育の大切さを確認する良い機会となりました。）

受賞取組：動画作成課題による Active Learning 教育の推進—高次脳機能障害に対する支援役割の理解を目指した新たな取り組み—

代 表 者：宮本礼子 准教授（健康福祉学部）

共同実施者：大嶋伸雄 教授（健康福祉学部）



（左から、上野学長、宮本准教授）

取組概要：高次脳機能障害の症状および作業療法支援の実践例の紹介動画作成を通じ、学生が有している知識を他者に分かりやすく伝える方法を考えさせる。学生に馴染み深い「一般投稿動画」を課題とし、“自身が視聴者だった場合”を想定させ、動画のクオリティに真剣に向き合う姿勢を引き出した。結果、受講した学生の授業外学修時間の増加や、学生の主体的な学修姿勢を引き出すことにつながった。

受賞理由：高次脳機能障害の症状や支援の実践例を一般の人に紹介する動画を、学生にシナリオ作成から撮影・編集等までを行わせ、発表させることにより、学生の能動性を引き出すとともに、知識・技術の定着を進め、授業外学修時間の増加に繋げている点。

【以下、代表者へのインタビュー】

—受賞・評価を受けた感想

この度はこのような栄誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。臨床でもその支援に悩む高次脳機能障害について、学生が楽しみながら主体的に学べる方法を長年模索してきた中でたどり着いたひとつの形ですので、このように評価していただけたことを本当にうれしく思います。

—この取組みを実施するにあたり、特に苦労した点

初年度は、学生がシナリオ作成・動画撮影・編集という課題に、どのくらい時間を要するかを把握することに苦労しました。課題の難易度に関しても、クライアントの設定を教員が考えすぎれば自由度が低下し、設定がなさ過ぎても難しくなります。2年日以降は前年度のFDアンケートの内容や学生からの意見を参考に、これらの調整を重ねました。

—この取組みに対する想い

近年は医療機関のみならず一般企業へ就職する学生も増加していますので、専門知識の修得だけではなく、それぞれの見据える将来に役立つ（と学生が思える）体験をしてほしい、という想いがありました。そのため、動画作成だけでなくコンセプトシートの作成も学生に依頼しました。またコンペという形で作品を評価し合うという方法を採用しました。課題自体は臨床に直結するテーマでありながら、「誰に何を伝えるか」、「コンセプトが人に伝わっているか」、「そのアイデアを人はどう評価するか」という視点を、学生自身が意識するきっかけになっていたら嬉しいです。

（式典終了後の座談会の様子）



（式典終了後、座談会を開催しました。取組みに携わった各教員より、普段の授業の実践からの気づき等について意見交換が行われ、非常に有意義な会となりました。）

2019 年度東京都立大学 ベスト・ティーチング・アワード特別賞

受賞取組：生命科学科英語課程—卒業に必要な全ての単位が英語で取得できるプログラムの確立—

代表者：安藤香奈絵 准教授（理学部）



(左から、上野学長、安藤准教授)

取組概要：社会のグローバル化、大学教育の国際化、学生の英語力向上に対応するため、英語のみで卒業に必要な全ての単位が取得可能な「生命科学英語課程」を確立した。

特色として、以下の3点が挙げられる。①既存の教育課程の授業を英語化しつつ、同じ授業を日本語でも開講する。②英語又は日英混合の形態を選択可能とする。③別枠の入試は行わず、入学後に学生の希望をもとに履修者を決定し、中途での変更も可能とする。

結果、本学学生の英語力及び国際競争力の強化、留学生の増加や受験生の増加に繋がった。

受賞理由：授業を英語と日本語で開講し、英語による学習機会を与えることは学生の英語力及び国際競争力を伸ばす効果が認められる。本学の代表的な教育の取組であることから、これまでの学科全体の取組に対し、特別に表彰する。

【以下、代表者へのインタビュー】

—受賞・評価を受けた感想

生命科学科の長年にわたる努力が認められ、とても嬉しく思います。上野学長を始め、多くの先生方にご理解とご指導をいただきました。連携してくださった他学部の先生方や教務課・国際課などの方々、海外協定校の先生方、英語課程事務局のスタッフの方々、そしてこの挑戦的な取り組みの取りまとめという大役を

任せてくださった生命科学科の皆様に感謝いたします。

—この取組みに対する想い

グローバル化した現代では、英語でのコミュニケーションがビジネスにも研究にも必須です。高度専門教育を英語で受けることで、国内外を問わず専門知識を生かして学び、働くための力をつけることができます。

その需要に応え、英語での学部教育プログラムは、近年スーパーグローバル大学など複数の大学で見られるようになってきました。

一方、本学の生命科学科英語課程は他大学と大きく異なる以下の特色を持っています。

1. 既存の生命科学科の教育課程の授業を英語化する。日本語でも従来通り開講する。
2. 英語だけでも、英語と日本語の授業を混ぜて履修することも可能。
3. 英語課程のための入試は行わず、入学後に学生の希望をもとに履修者を決定し、中途での変更も可能。

1によって、歴史ある東京都立大学理学部生命科学科がこれまでに蓄積してきたカリキュラムの特色や専門性をそのまま生かしています。2と3によって、学生が自身の英語スキルに合わせて柔軟に英語授業を履修科目に取り入れることができます。

この柔軟性により、生命科学科英語課程の授業は、英語の得意でない日本人学生から日本語の話せない留学生まで、様々なバックグラウンドの学生さんが一緒に生命科学を学ぶ、多様で刺激に満ちたクラスになっています。その良さを引き出すために、学生達と先生方にどのようなサポートが必要か、また、このプログラムの特色を維持しつつ、国際的に競争できる質の高いものにするにはどうしたらよいかについて、いつも考えています。